

董康『書舶庸譚』九卷本譯注（九）

芳村弘道

書舶庸譚卷九

〔民國二十五年 昭和十一年 丙子歲 一九三六年 八月十九日から八月三十一日まで〕

二十五年八月十九日〔丙子七月初三日〕

晴れ。私は昨年から國立北京大學で講義を擔當しており、六月に入ると夏休みになるのが通例であるので、玉姫と一緒に日本の熱海に避暑に出かけようと思ひ、田中〔慶太郎〕に依頼して古屋旅館を豫約してもらふことにした。ところが思ひがけず俗事にかかざらぬ旅行に出られなかつた。今月の十一日に北京から上海に戻り、ようやく本日に日程を定め、長崎丸に乗船して東航することになった。村田政子は我が家に来てから二十餘年になる。中國語ができるので、彼女を同行させ玉姫のお伴にした。七時頃、從弟の少卿と甥の妻、また李紫東も相前後して拙宅まで見送りに来る。車を備へ大坂埠頭に行き乗船。甥の〔董〕景熙が先に來ており、私の荷物の世話をしてくれる。私の船室は一二二番であつた。劉錫堂と劉松存、井手武人が續いてやつてく

る。錫堂が私達の記念寫眞を撮ってくれる。九時、出航。玉姫が私に、「民國十一年以來、黃浦江のほとりで涙を流してあなたをお見送りしたことが度々ございましたが、今、お伴ができました、何とうれしいことでしょう」といったので、私が「夫婦になつて今年で二十年。お前は昔のとおり美しいままであるが、私は長年、各地を行き來する生活であつた。今回の旅行の目的は他になく、ただお前に新婚氣分の埋め合わせをしてあげるだけだ」というと、玉姫はにっこりと笑つた。客室に行くと、長崎の警察署から簡單な質問を受けた。ついで税關の職員が入室して荷物の検査を行う。携帶した書籍が少し多いので、頗る不自然に感じていた。私はようやく日本が思想上の理由で書籍を國禁扱いにしていることに氣付いた。この船は航路を變更し、長崎止まりになつたと聞き、そこで許靜仁大使に電報を打ち、長崎領事館に命じてうまく取りはからつてくれと依頼した。船が玄界灘を航行し、玉姫は船酔いして寝込んだ。部屋が狭くて蒸し暑さに耐えられない。夜に何度も起き、船縁の手すりにつかまって眺めていると、知らないうちに東の空が白んでいた。

（1）李紫東は本書卷一下・一月三十日に「書友李紫東」として見える。

（2）許靜仁、名は世英（同治十二年、一八七三—民國五十三年、一九六四）。靜仁は字（また俊人とも字す）。光緒二十三年（一八九七）丁酉科の拔貢となつて刑部の職に任じられ、宣統二年（一九一〇）、法律制度視察のため歐米に行く。辛亥革命後、北京政府の司法總長などを歴任の後、民國二十五年（一九三六）二月に日本大使に任命され、同二十七年一月に召還されるまで、民國政府、最後の日本大使の任にあった。同三十九年（一九五〇）に臺灣に渡り、總統府資政となり、同五十三年（一九六四）に臺北で病没（『民國人物大辭典』頁八三三参照）。

二十日

晴れ。毅孫に手紙を出す。また小林（忠治郎）に電報を打ち旅程を告げる。十二時、長崎港に入る。長崎領事の宜興の任家豊が館員の王廷環と井手某を連れてやって来て、昨日、大使館から電話があり、お待ちし、お世話するように命じられましたとのこと。長崎丸が神戸行きを止めたのは、雲仙避暑の西洋各國人が上海に歸るのを急いだためであることが訊ねてみて分かった。船長が乗車券を二枚くれる。上陸して客室で休息。携帯した書籍は、幸いに理解が得られ、詳しい検査を免れた。二時頃、門司行き急行列車に行き東行する。通過した肥前の國は、地味が豊かで稲作に適しており、青々とした水田が連なっていて大變に私の故郷と似ていた。七時五十分、門司の駐門司事務所に到着。長崎副領事の周仲敏が領事の電話を受けて出迎えに来て、一緒に連絡船に乗り、下關まで行ってくれる。八時半に出發。すでに下の段の寢臺がなかったので、車内が炎熱のようので、十二時になつてようやく寝られた。

二十一日

晴れ。六時起床。梯子の昇り降りがしにくく、うっかり床に墜ちて左足の親指を痛めた。七時半、京都驛に到着。小林が息子の長文・勝政をつれて出迎えてくれる。彼の別荘に招かれ、しばらく宿る【左京區下鴨北園町三丁目七番地の一】。小林はすでに嫁をとつて一緒に暮らしており、心を盡くし行き届いた接待であった。もともと狩野【直喜】博士などを訪問するつもりであったが、出かけづらく中止した。

二十二日

曇り。九時頃、小林夫婦と長文たち兄弟と一緒に京都驛まで行き見送ってくれる。十時すぎに出發。午後五時五十分、熱海驛着。古屋旅館の主人が京都からの電話を受けて、番頭を迎えによこした。三階の四三番に宿泊。右は魚見岬（崎）がわになっており、相模灣を見下ろし、景色がよい。夜になって雨。

二十三日

曇り。朝、田中に手紙を出す。午後二時、玉姫が政子を連れて海岸へ散歩に出るが、私は足の怪我のため附いて行かなかつた。旅館はひっそりとしている。最近に入手した宋拓の法帖三種を取り出して鑑賞し、題識を後記のごとく轉録する⁽¹⁾。このうち「二哥帖」に花押があつた。かつて海昌の余懋學の『辯林』を見たところ、「今人、花押を作すに、毎の上に必ず一畫を加ふるは、王荊公（北宋の王安石）に始まる。石字は初めに一畫を横にし、左に一脚を引き、中に一圈を爲す。公は性

急にして毎に長短粗細の處有り。後、以て佳と爲し、遂に之に效ふ」と記していた。按ずるに日本の古寫本は概ね鎌倉時代には、卷末の題名の下に常に花押が一つ書かれてあり、これの體裁と同様である。早く海外に流傳したものである。今この法帖を見ると、『辯林』は考え違いと見なせる。夜になってから雨。海岸で藝妓の踊り大會がある。花火が盛大に揚げられ、天空に爆發する。數萬粒の星をなすものや、赤・黄・緑の三色の輪を描いて直徑約十餘丈もあり、みな花の形が幻想的に現れ出るものがあって、大變に壯觀。

濟美帖【王羲之「二哥帖」 王獻之「乞假表」】

世に右軍（王羲之）の「借船帖」最も佳なりと傳ふれども、今は觀るを得べからず。「二哥帖（帖）」影印本『宋拓王帖三種』へ以下、影印本と略稱は「信」に作る）は山陰の張氏の所藏に係る。丙戌（順治三年、一六四六）冬、司農公、浙より閩の臬司（按察使）の任に赴き、錢塘に得たり。異寶を獲たるが如く、日びに臨摹（「摹」、影印本「摩」に作る）を事とす。指を屈すること今に於いて已に六十餘載。延、宋揚『淳化閣（帖）』『太清樓（帖）』『淳熙續帖』『絳帖』『鼎帖』『汝帖』『長沙帖』『星鳳樓（帖）』の十數種を取り、細かに校對を加ふるに、總べて此の帖（帖）」影印本「信」に作る）無し。眞に希世の珍なり。行くゆく將に名手を訪ね、貞珉（よい石）に重勒（重刻）し、以て傳へて不朽ならしめんとす。康熙壬辰（五十一年、一七二二）重九（九月九日）、琅瑯山人周在延謹んで識す。

宋揚の「聖教（序）」を得て後、十日にして復た此の帖を獲。

鈎勒の妙、未曾有を得たり。愈いよ歎ず、『淳化』閣帖」流傳し、全く二王の眞面目を失ふを。己酉（雍正七年、一七二九）仲春下流、毘陵郡署の來雨齋中に書す。廷敬。

右軍の七子、長の元之は早く卒し、次の擬之・徽之・操之・獻之、皆名を知られ、『晉書』に在りて傳有り。餘の二人は考ふる無し。此の「二哥」は即ち擬之なり。此の帖既に宋帖中に在らず、又た「官奴」「玉潤」の諸單行本の考ふべき者に非ず。余嘗て「建業昇元」の殘帖三卷を見るに、精古は定武の「稷（稷）序（蘭亭序）」に次ぐべし。此の帖及び「大令表」は、或いは後主（後唐の後主李煜）の文房の收撫する所なるか。米南宮（北宋の米芾）、石本を論じ、轉折毫鉞、備さに盡すを以て宗と爲す。此れ猶ほ以て之に當つるに足り、所謂の眞蹟に下ること一等なる者なり。鄭府、購得し眎され、因りて册後に識す。成親王。

〔宋楊王大令〕十三行【錢大昕題簽】

毘陵の錢維喬曾て觀る。

右、晉の中書令、王獻之の書する所の「洛神賦」十三行、並びに柳誠懸（唐の柳公權）の題、宋揚本なり。

余見る所の大令（王獻之）の「十三行」、此の本特に佳。鈐封（封）、『庸譚』は「豊」に誤る。今、影印本に従い訂正す）の三印、古篆にして殊色班（班）『庸譚』は「斑」に誤る。影印本に従い訂正然たり。吾が郷の豊考功（明の豊坊）の藏本、多く此の印を用ふ。此の後の小楷二十五字、未だ名を署せずと雖も、其の考功の筆爲ること疑ひ無し。宋揚本と云ふは信に然り。戊申（乾隆五十三年）

年、一七八八）秋九月、書船居士盧登焯³識す。

考功の書法は、明代第一なり。小楷更に妙にして、文「徵明」・董「其昌」有りと雖も、能く及ぶこと無きなり。得る所の其の二十五字、目を暢（「揚」、『庸譚』は「揚」に誤る。影印本に従い訂正）ぶる能はず。世に狂怪の草書多きは、皆贋本にして、宜しく之に鑑るべし。書船又た識す。

『宣和「書」譜』中に收むる所の「十三行」、後に亦た柳公權の跋有り。趙吳興（元の趙孟頫）以て神物と爲すなり。此の本、割截し裝して十三行を成す。世に未だ見ざる所の本。書船。

「洛神十三行」、賈似道の所藏にして、趙文敏（趙孟頫）之を得。眞跡は今、見るべからず。石刻惟だ宋揚のみ眞跡に下ること一等。此の本は石刻中の至寶なり。嘉慶甲子（九年、一八〇四）四月廿五日、桃源農夫焯（盧登焯⁴）。

大令の「十三行」、徽宗の時に九行を得。賈秋壑（賈似道）復た四行を得、合はせて十三行と爲す。元の時、松雪（趙孟頫）に歸し、明の時、孫文介公（孫愼行）に歸し、諸を予（糸）宴齋に刻す。『停雲「帖」』『快雪「帖」』の能く及ぶ所に非ず。此の本は竹汀（錢大昕）定めて宋揚と爲す。又予宴齋以前に在りての古刻なるか。嘉慶戊辰（十三年、一八〇八）九月、金沙（金壇）の段玉裁題す。

此れ越州石氏本なり。光緒十六年（一八九〇）七月、費念慈、幼喆丈の齋中に觀て之を記す。

樂毅論

古今の正書は右軍を以て第一と爲し、右軍の正書は「樂毅論」を以て第一と爲す。「樂毅論」は未だ兩字を改めざる古本を以て第一と爲す。此れ唐以後の有する所に非ざるなり。宋拓（「拓」原本「揚」に作る。影印本に従い改む）と云はんか。室に此の「論」有り、當に必ず吉祥の雲の日日之を守ること有るべし。

唐摹本を以て比較するに、「致」「從」の二字連貫せざるを怪しむこと無きなり。此の本、宋に在りて惟だ米老（米芾）のみ之を見るのみ。明には則ち吳文定公（吳寬）の家に藏せらる。

宋揚「樂毅論」、字形は世に傳はる所に比ぶるに、大小類せず。又鍾法（魏の鍾繇の筆法）有り。定めて是れ古本の寶とすべきなり。丙寅正（「正」影印本の底本は缺損がある）月廿二日、龍江關の舟中に題す。

此れ梁揚本。字極めて奇古なり。今世、俗に傳はる所は、皆唐人の硬黃（硬黃紙を用いた模寫）、褚中書令（褚遂良）の書なり。此に對すれば商周の彝鼎、三代の法物の如し。晚研觀す。

「樂毅論」は、正書の第一。梁世に模出し、天下之を珍とす。蕭（蕭子雲）阮（阮研）の流より、臨學せざる莫し。陳の天嘉中（五六〇—五六五）、人得て以て文帝に獻じ、帝、始興王に賜ふ。王、牧と作り、境中に即ち以て吾に示さる。昔、其の妙を聞き、今、其の眞を觀る。閱玩すること良久しく、朝に匪ざれば伊れ夕べ。始興薨じて後、仍ち廢帝に屬す。廢帝既に歿し、又た餘杭公主に屬す。公主は帝王の重んずる所を以て、恆に寶愛を加ふ。陳世の諸王は皆求め得ず。天下一統、四海同文に及び、處處に追尋し、

累載にして方めて得たり。此の書は意を運工に留め、特に神妙を盡す。其の間、兩字を書き誤るも、點除を欲せず、遂に雌黃もて治め定め、然る後に筆を用ふ。陶隱居（梁の陶弘景）云ふ、「大雅吟、樂毅論、太師箴等は、筆力鮮媚にして、紙墨精新なり」と。斯の言之を得たり。釋智永記す。

宋の米芾『書史』の「樂毅論」の智永跋に云ふ、「梁世摹出し、天下之を珍とす」と。其の間、兩字を書き誤るの本流傳す。余は杭州の天竺の僧の處に於いて一本を得。上に誤れる兩字を改むる有り。又た唐の諱を闕かず、是れ梁の本なり。

余嘗て戯れに人の爲に書を評して云ふ、小字は癡凍蠅を作す莫かれ。「樂毅論」は「遺教經」に勝る。大字は「瘞鶴銘」に過ぐるもの無し。人に隨ひ計を爲し、終に後人自づから一家を成し、始めて眞に偏る。然れども適たま小楷を作せば、亦た規矩（「矩」影印本「架」に作る）を擺脫すること能はず。客曰く、「子何ぞ子の凍蠅を捨て、而して人の凍蠅を謂ふ」と。予以て之に應ふる事無し。固より知る、書は某踴等の技と雖も、傳へられざるの妙を得るに非ざれば、未だ工みなり易からざるを。黃庭堅。

朱晦翁（南宋の朱熹）跋。舊石本「樂毅論」、沈存中（北宋の沈括）の『夢溪筆談』に云ふ、皇祐中、嘗て高紳の子、錢唐の主簿の安世の家に於いて此の石を見る。後十餘年、安世、蘇州に在り、石已に破れて數片と爲り、鐵を以て之を束ぬ。後、安世死し、石、所在を知らず。或いは蘇州の一富家之を得たりと云ふも、亦た復た見えず、と。存中記す所は歐陽公（北宋の歐陽脩）

と同じからざること此くの如し。延之（南宋の尤袤）の所謂る錫山の徐氏なる者は、豈又た之を蘇州の富家に得るものならんか。延之又た損泐して模糊たりと謂へば、則ち石幸いに存すと雖（「雖」、『庸譚』は「所」に誤る。影印本に従い訂正）も、亦復た此の本の如きの清勁無し。『續閣帖』中に刻する所の全文、又たよりて來たる所を知らず。頃年、曾て折子明の家に於いて其の藏する所を見るに、筆意絶だ徐季海（唐の徐浩）に類するも、要は皆此の本の比には非ざるなり。

「燕」字の四點、前人、之を連飛と謂ふ。「於」字の兩點は蟬聯（連續）す。此れ潛心細玩するに非ざれば、其の筆法の神奇を知ること能はず。既に已に之を知れば、則ち蘭亭の眞僞は眼に到れば即ち知り、數墨を尋行するを須ふること無し。古本の貴ぶべきは是に在り。然れども外人と道ふこと難きなり。

趙希鶴（「鶴」、『庸譚』は「鶴」に誤る。影印本に従い訂正）の『洞天清錄』。世傳の二王帖は、皆、眞蹟を以て摹勒するも、獨り「樂毅論」のみ石に就いて書丹す。其の石は高學士紳の家に在り。已に残缺し、「海」字に至りては、後に轉じて趙立之の處に屬す。今、重摹する者、猶ほ趙立之の印有り。予、嘉熙庚子（四年、一二四〇）、嶺右より回りに宜春に至り、元本を一士人の家に見る。北紙北墨を用ひ、一字の殘缺無く、而かも清勁適媚、正に「蘭亭」に類す。字形は、今世見る所の重摹本に比ぶるに、幾ど小さきこと一倍。此れ蓋し齊梁間の搨（搨）影印本「拓」に作る）本にして、眞に人間希世の寶なり。

董其昌『書禪室隨筆』。「樂毅論」は、梁世の摹する所と唐摹と字形各おの異なり、淳熙の祕閣は梁摹本なり。予が家の『戲鴻堂帖』は唐摹本なり。又た一本の唐摹の長安の李氏に在る有り。曾て予に跋を屬す。亦た文壽承（明の文彭）の跋有り。蓋し貞觀中、太宗、褚遂良等に命じ六本を摹せしめ、魏徵諸臣に賜はらん。此の六本は唐より今に至る。予猶ほ其の二を見るに及ぶ。恨むらくは梁摹の白麻紙の眞蹟、新都の吳生の有する所と爲るを。

幼拙仁兄、梁摹の「樂毅論」を得、屬して諸家の題跋を録し、以て攷鏡に資せしむ。

予、舊と題語有り、索められて後に附す。未だ續貂の諂りを貽るを免れず。

余、嘗て「樂毅論」の結體平正にして、「黃庭經」「曹娥碑」「東方（朔）畫贊」と大いに相い逕庭あるを疑ふ。之を以て摹寫し試卷すれば、則ち甚だ相い宜し。今、此の本を覩て、始めて梁摹宋搨の貴ぶべきを知る。『停雲館』刻する所は、乃ち唐人の臨本にして、已に廬山の眞面目に非ず。況んや轉た相い摹勒するものをや。此の本の第十一行の「使」字、今「致」字に作る。第二十五行の「後」字、今「從」字に作る。「燕」字の四點は連飛す。「於」字の兩點は蟬聯す。皆、俗本（影印本「本」字あり、従い補う）と同じからず。寶とすべし寶とすべし。光緒戊戌（二十四年、一八九八）夏四月、嘉興の張鳴珂。

幼拙二兄世大人、「樂毅論」を覽ることを賜る。案頭に留むること多日、朝夕賞玩す。一昨、程維『庸譚』は「雄」に誤る。

影印本に従い訂正）庵、之を見て云ふ、「涿州の馮相國刻本、世の珍弄と爲る。然れども此の精采無きなり」と。第一跋、審定し以て董香光（董其昌）の眞蹟と爲す。圖章は皆收藏家の蓋する所なり。未だ知らず確（影印本「稿」に作る）かなるか否かを。高明の之を察することを祈る。拙跋、附し上る。敬しみて道安を請ふ。弟鳴珂頓首、四月初九日。

- (1) この「宋拓の法帖三種」は、董康の歸國後、程なくして上海の商務印書館が「宋拓王帖三種」と題し影印している（民國二十五年（一九三六）十二月）。書品濶大で、奥付に「珂羅版雙層宣紙精印／每冊實價國幣參元／略一行」收藏者 董綬經（以下略）とある。王羲之の「二哥哥帖」と王獻之の「乞假帖」を合わせて「濟美帖」としているのが、實際の收録は四種である。影印本と對比すると、影印本の三種の配次は、「宋楊王太令十三行」「庸譚」の原文は「宋楊王太令」の五字を缺く。「濟美帖」「樂毅論」となっており、後文とは異なっている。題識の配列も少しく違いを見る。また移録の題識は抜粹で、すべてを録していない（影印本に據って後の注に若干補録した。この「宋拓王帖三種」について、中田勇次郎先生の『王羲之を中心とする法帖の研究』（二玄社、一九六〇、頁一五二）は「この中の二哥哥帖は王羲之の尺牘とあるが、他の集帖や著録などにも見當らないものである。内容は王羲之が二男の凝之に與えた書函である。書は王に似ているが、文章には王羲之のほかのものと異つたところがあり、手紙の體例も普通のものと全然合わない。こういうものは王の尺牘として信じられない種類のもの」と斷じておられる。この法帖は、いわゆる偽帖に屬するものである。
- (2) 成親王の跋の後に、影印本には穆楊阿（耕珊）の二跋および「戊辰（民國十七年（一九二八）六月既望上虞羅振玉觀」の題識一行がある。
- (3) 影印本では、この跋の後に「豐考功三印妙絕。鄭谷口兩印稍漫漶。諦視尚可見（豐考功の三印は妙絶なり。鄭谷口の兩印は稍漫漶なれども、諦視すれば尚ほ見るべし）」の一行がある。
- (4) この跋の後に、影印本には傅祖緒・張鳳翽・趙于密の題識がある。
- (5) 『書舶庸譚』の原文は「其間書誤兩字本流傳」とするが、影印本の原識

語は「其間書誤兩字」の下に「遂以雌黃治定然後用筆今世無此改誤兩字本流傳（遂に雌黃を以て治め定め、然る後に筆を用ふ。今世、此の誤れる兩字を改むる無きの本流傳す）」の二十一字があつて文意が通ずる。董康の誤脱である。

二十四日

晴れ。八時頃、玉姫と政子を連れて東京に出かける。十一時に驛に到着、文求堂に行く。折から田中の次男の震二が一週間前に病没し、一家が葉山の本宅に出かけていた。震二は第一高等學校を卒業し、和漢の學それぞれに造詣が深かった。二十六歳で白玉樓に召され、餘りにも悲しく惜しいことである。主人が不在なので、政子は玉姫を誘い、世田谷區赤堤町【二丁目四百五十七番地】の彼女の郷里に行きあちこち見て廻る。私は大使館に行き、靜仁大使を訪問したが、先日、輕井澤に避暑に出てまだ戻っていなかった。孫伯醇秘書と會い、連れだつて彼の寓居に行き晝食をとる。二時頃、一緒に上野花園園に行き、勝山〔岳陽〕を訪問。美術學校教師の鎌倉芳太郎にも會う。三時半、玉姫もここに来る。五時十分の汽車に乗って熱海に戻る。驛に到着した頃には、すでに七時をまわっていた。政子の母親の家は田地が豊かで、兄の子供達は全部で十人いる。客座に玉姫の二十一歳の時の寫眞を並べてあり、政子が鐵保を抱いて側に仕えているのが寫っている。皆は玉姫がほっそりとして、昔のとおりであるが信じられないようすであった。夜になって雨。

二十五日

晴れ。鐵保に手紙を送る。李紫東の手紙を受け取る。宋版の一葉が附いていた。版高、五寸餘り。左右雙邊、半葉十一行、行ごとに二十字。上下線黒口。板心の上に字數を記す。魚尾の下に「斷」字を標している。法律書の斷獄篇である。下魚尾の上に葉數を記す。下は「明百」の二字の草書になっている。刻工の名前であろう。「諸考囚の限滿」「諸鞠獄官の囚を停めて待問する者」「諸鞠獄者」のすべて三箇條が残存する。各條の首行は頭揃え、次行は一格空けにして「類說」の二字を冒頭に置くが、これは解釋の意味。清王室の内閣大庫から出たという。ばらばらの未裝訂で、書腦（背表紙側の綴じしろ部分）がとても廣い。琉璃廠の文祿堂の王晉卿が彥明允【憲】の家で入手したもの。約五十葉あまりあるが、首尾が缺けている。すでに北平圖書館に賣つたが、この葉を手許において、私に書名を調べるよう依頼した。初段の「類說」は、「諸考囚不過三度（諸の囚を考へ拷）するは三度を過ぎず）」と題すべきである。當初、『唐律』の原文に依據すると思つたが、實際はそうではなかった。ここに以下の通り訂正する。その文章は次のとおり。

「類說」の上條は囚人を訊問することで法律が起こされ、この條は規定を超えることに關して法文が作られており、上下の内容が關連していないようであるが、根本と末節はともに法律制度に歸結している。「若考過三度（若し考三度を過ぐ）」から「杖一百」までは、罪は下の條文の「違法移囚（法に違へて囚を移す）」の違律と同じ科罪である。「杖數過者、反坐所剩（杖數の過ぐる者、反て剩す所に坐る）」も、下

の條文の「從輕入重、以所剩論(輕きより重きに入り、剩す所を以て論ず)」と區別がない。「以故致死者、徒二年(故を以て死に致す者は、徒二年)」は、「五刑」の中の制度によっており、下の條文の「諸婦人犯死罪(諸の婦人の死罪を犯す)から「徒二年」までの違制と類似している。その「即有瘡病(即し瘡病有らば)」から「亦杖一百」までは、上文と同類である。「若決杖答(若し杖、答を決せば)」というのは違令である。「以故致死者、徒一年半(故を以て死に致す者は、一年半)」は、罪は「擅興律」の「若有所造作(若し造作する所有らば)」から「徒一年半」までと同じで、その同類である。「若依法考決(若し法に依りて考決し)」から「■違者杖六十」までは、罪は上の條文の立案と同じであり、判決も同じである。この法律は、ひとつには「下の條文の『諸婦人犯死罪(諸の婦人の死罪を犯す)』から「徒二年」までの違制と類似している」といっており、ひとつには『若決杖答(若し杖、答を決せば)』というのは、違令である」といっている。また下の條文の「停囚待問下、不即發遣(囚を停めて問下するを待つに、即ち發遣せざれば)」は違令の罪である。「三日以上、杖一百」は違律の罪である。考ふるに、『唐律』雜律篇下の「違令」の條に「違令者、答五十。別式、減一等(令に違う者、答五十。式に別すれば、一等を減ず)」とあるが、違制および違律の文はまったくない。必ず宋代の編敕にこうした區別があったに違いない。それゆえ「類說」に引用したのである。宋代には編敕が律文より重んぜられた。内閣大庫の所藏は、みな元の伯顔が宋を滅ぼした時に、臨安から船で北へと運搬したものである。また本書は書腦に穴を空けた裝訂がなされておらず、大

庫所藏の他の宋版、例えば『文苑英華』と同一の形式になっている⁽¹⁾。これが宋人の撰著であることは疑いない。

午後六時、女中が玉姬を案内して整髪しに「熱海」銀座に行く。暮れ方、旅館に戻る。

(1)「書腦に穴を空けた裝訂」でなく、宋版の『文苑英華』と同一の形式」といのは、この法律書の裝訂が線裝ではなく、宋代に一般的であった蝴蝶裝であったことをいう。

二十六日

雨。四三番から三階の三一番に移る。この部屋は、先の部屋よりも四疊廣い。眺望がたいへん素晴らしい。一日中、霧が立ちこめて、山と海との區別がつかない。夜になって雨。波が岸に碎けて音を立て、それで窓も震え響く。

江城子⁽¹⁾

江城子

裙腰寬褪病新瘥。

裙腰寬褪して病新に瘥ゆ

試輕羅。

輕羅を試み

倚庭柯。

庭柯に倚る

廿載軟紅⁽²⁾

廿載の軟紅

影事記曾麼⁽³⁾

影事 記すこと曾てせんか

蠟燭香溫花欲暝

蠟燭之香溫く花暝らんと欲し

垂偏髻⁽⁴⁾

偏髻を垂れ

頰雙渦⁽⁵⁾

頰雙渦

而今靄館悵蹉跎。而今靄館蹉跎を悵む

鎖修蛾。修蛾を鎖ざし

奈愁何。愁を奈何せん

且展龍鬚。且く龍鬚を展べ

消受晚涼多。晚涼を消受すること多し

等風塵誰省得。是の風塵を等しくすること誰か省し得ん

卿一妹。卿の一妹

我三哥。我の三哥

江城子

病氣が治ったばかりで裾の腰回りがゆるんだ。軽い羅を試しに羽織って、庭木にもたれた。二十年も繁華な都市で過ごしたが、過去の出来事を覚えていようか。蠟燭は燃え盡きて香爐は暖かく花は目を閉じようとし、短い髪を垂らした髪型で、兩の頬には赤い笑くぼ「のわたし」。

今、旅館で失意の情を深めて悲しむ。長い眉をひそめるばかりで、この愁いをどうすることもできない。まあ暫くごさを廣げて夕涼みを楽しもう。この風塵止まない世界に生きることを誰が分かってくれらるだろう。それは、あなたの一人の妹さん、そして私の三人の兄さん。

(1)「江城子」は詞牌名。三十五字、五平韻の單調體と單調の形式をくり返した雙調體がある。『詞譜』卷二には雙調體として北宋の蘇軾の作を例に挙げる。本作は雙調體であり、前後段とも表面では女性を詠じているが、董康自身の詠嘆を寓していると思われる。

(2)「軟紅」は「軟紅塵」ともいう。都市の繁華、にぎわいをいう。宋の蘇軾「次韻蔣穎叔錢穆父從駕景靈宮（蔣穎叔・錢穆父の景靈宮に從駕するに次韻す二首）其二（東坡全集）卷二十」に「半白不羞垂領髮、軟紅猶戀屬車塵（半白 羞ぢず領に垂るる髮、軟紅 猶ほ戀ふは車塵に屬す）」とあり、その自注に「前輩戲語有西湖風月、不如東華軟紅香土（前輩の戲語に、西湖の風月は、東華（宋の宮城東面の門名）の軟紅香土に如かずと有り）」というのに基づく。

(3)「影事記曾麼」の「影事」は、世俗の一切の事は幻影と同じであるという意味の佛教語（『楞嚴經』卷五）。後に往事の意味にも用いる。清の厲鶚「春雨夜坐」詩「樊榭山房集」卷三に「影事詎可追、新愁何用覓（影事詎ぞ追ふべけん、新愁 何を用てか覓めん）」とある。ここでは後者の意に解釋した。「記」は記憶の意。「曾麼」の「麼」は疑問を表す語氣詞であるが、「曾麼」の用例を未だ見出さず、「曾」を假に反語を表す副詞と解釋した。

(4)「偏髻」は「偏髻髻」の略。偏髻髻は北齊の宮中女官の髪型（『通典』卷六十二）。前日に玉姬が整髪したことから連想して用いたのであろう。

(5)「渦」は「笑渦」の略。「笑渦」は「笑窩」とも書き、笑くぼをいう。

(6)「龍鬚」は蘭草の一種の「龍鬚草」のこと。ここでは、これで編んだ数物、こざ。

(7)「風塵」は、風に吹かれて上がる塵をいうが、また世俗、塵事、戦亂などの意味をもつ。ここでは世俗の意味に解したが、民國期の争亂の意味も含んでいよう。

二十七

晴れ。八時五十五分の列車に乗り東京に出かける。勝山が出迎え、一緒に公使館に行き、孫伯醇と會う。村上（貞吉）君が續いて到着。彼はちょうど「中國雅片禁令考」を編集集中であった。私は「雅片の原名は嬰粟である。『本草』にあるはずである。禁例となるに至ったことについては、『十一朝東華錄』によって、その顛末を調べるとよい。合わせて歴朝における法律編修の際の案語を参照すると、きっと遺漏がなからう」と告げた。村上は私とともに文求堂に至ってから歸った。

田中がひとりだけで東京に来ていた。私は彼にお悔やみを述べた。晴靄夫人はまだ哀しみに沈んでおり、葉山に居續けて戻っていなかった。文求堂で毛西河（清の毛奇齡）の『曼殊留影』一冊を購入。本書は、商務印書館の印行本を見てから今に至るまで脳裏にまわり着いて忘れられなかった。日本に渡って舊友の永坂石埭【周】が入手していたとは全く知らなかった。冊中には有名人の題識が非常に多い。その概略を下文に記しておく。田中はまた、「石埭所藏の宋紹興本『梅宛陵集』は全卷の半分強が残存しており、これを千二百圓で購入し、琉璃廠の書肆に賣却して三千二百圓で賣れた」と告げ、「その本の行方を知っているかどうか」と訊ねた。私は、「舊京（北京）で宋版を愛好するのは、傅沅叔同年（傅增湘）と周叔弢（周運）の二人だけであるが、私が南行する（上海に赴く）時には、この本の購入の話しを全然耳にすることがなかった。上海の潘明訓（潘宗周）か陳澄衷（正しくは陳澄中）が手に入れたのではないかと思われる」と答えた。勝山が續いてやってきた。少し座ってから、私を東京驛まで見送ってくれた。三時十分の列車で熱海に戻る。

曼殊留視冊

杜聯「序」【會稽（浙江省紹興市）「の人」】

趙魏「優曇贖劫」題額【一七四六一八二五 字（正しくは號）

は洛生、號（正しくは字）は普（正しくは晉）齋。仁和（浙江省杭州市）の人。碑版を考證するに最も精しく、所藏の金石に『竹庵（庵）金石目』有り。年老いて尤も篤く、衣褐完からずと雖も、猶ほ堅く守りて釋せず。好古、癖を成す者と謂ふべし】

小影【無款】

張闇然「七絶」四首【茂苑（江蘇省蘇州市）】

梁清標「沁園春」詞【一六二〇—一六九二】字は玉立、號蕉林。直隸眞定（河北省石家莊市正定縣）の人。明の崇禎癸未（十六年、一六四三）の進士。清朝にて、官は保文（影印本「和」に作るのが正しい）殿大學士に至る。鑒賞に精しく、所藏の法書名畫は天下に甲たり。『秋碧堂法帖』を刻し、『蕉林詩集』有り】

張奐（影印本「英」に作るのが正しい）「七絶」四首【一六三七—一七〇八】字は敦復、晩に圃翁と號す。桐城（安徽省安慶市桐城縣級市）の人。康熙丁未（六年、一六六七）の進士。官は文華殿大學士に至る。諡は文端。著に『存誠堂詩集』有り（『庸譚』は「有」を脱す。影印本により補う）】

曹禾「七絶」二首【一六三七—一六九九】字は頌嘉、號は峨眉。江南の江陰（江蘇省無錫市江陰縣級市）の人。康熙甲辰（三年一六六四）の進士。官は内閣中書たり。博學鴻詞に擧げられ、「翰林院」編修を授けられ、官は祭酒に至る。『峨眉集』有り】

方象瑛「七絶」四首【字は渭仁。遂安（浙江省杭州市淳安縣千島湖底に没す）の人。康熙丁未の進士。學（衍字、影印本なし）鴻博（博學鴻詞の略稱）に擧げられ、官は編修たり。『健松（影印本は「松」の古字「案」に作る）齋詩』有り】

張鴻烈「七絶」四首【字は毅文、號は涇原。山陽（江蘇省淮安市）の人。廩（蔭）監生にて、鴻博に擧げられ、「翰林院」檢討を授けらる。降級せられて國子助教に改めらる。大理寺に遷り、副ふ

るに憂（親の喪）を以て歸る。善く山水を畫く】

蔡升元「月上紗窗烏夜啼」詞【一六五二—一七二二】字（正しくは號）は徵元、號（正しくは字）は方麓。德清（浙江省湖州市德清縣）の人。康熙壬戌（二十一年、一六八二）の第一人及第（狀元）。官は禮部尙書に至る。『紀恩詩』有り】

朱彝尊「水仙子」二首【一六二九—一七〇九】字は錫鬯、號は竹垞た。秀水（浙江省嘉興市秀州區）の人。布衣を以て鴻博に擧げられ、檢討を授けらる。『曝書亭集』有り】

田需「七絶」四首【字は鹿關。濟南（山東省濟南市）の人。鴻博に擧げられ、官は編修たり】

馮勛きん「七絶」八首【約一六五〇—一七二五】字は方寅、號は勉曾、又號は葑東逸史。元和（江蘇省蘇州市）の人。布衣を以て鴻詞に擧げられ、檢討を授けらる。著に『葑東集』有り】

陸弘定「七絶」四首【字は紫度、號は輪山。嘉興（浙江省嘉興市）の人。官は文學に至る】

任辰旦「七絶」四首【字は千之、號は待庵。蕭山（浙江省蕭山市）の人。康熙丁未（六年、一六六七）の進士。官は兵科給事中に至る】

張廷瓚「七絶」四首【字は由臣い。桐城の人。康熙己未（十八年、一六八九）の進士。大學士の英の子】

姜啓「七律」一首【字は開心、又字は青鳥。會稽の人。官は州丞たり】

鄭勳「七絶」四首【字は簡香。山陰（浙江省紹興市）の人。官は

驃騎都尉たり】

王三傑「哀詞」「發劄詞」（下に影印本「五首」の二字あり）【山陰3の人】

趙執信「七絶」二首【二六二二—一七四四】字は仲符、號は秋谷。山東益都（山東省青州市）の人。康熙己未の進士。官は編修たり。

『飴山詩集』有り】

張睿「七絶」二首

李澄中「七律」一首【一六二九—一七〇〇】字は渭生（正しくは渭清）、號は雷田、又號は漁村。山東諸城（山東省濰坊市諸城縣級市）の人。貢生に拔ぬげられ、鴻博に擧げられ、檢討を授けらる。官は翰林侍讀に至る。『臥象山房集』『白雲村集』等有り】

毛奇齡「曼殊葬銘」「金絨兒從葬銘」「曼殊別傳」及び「題識」

王源「跋」

王宗炎「跋」

(1) 『曼殊留影』の商務印書館影印本は民國十九年（一九三〇）九月の出版である。奥附に「中華民國十九年九月初版／珂羅版雙層宣紙印／每册大洋肆元／外埠酌加運費滙費／發行者 中華學藝社／印刷者 上海寶山路 商務印書館／發行所 上海及各埠 商務印書館」とある。

(2) 永坂石埭（弘化二年一八四五—大正十三年一九二四）、名は周、通稱は周二。尾張名古屋の人。代々の醫業を嗣ぐかたわら、森春濤門の詩人として名を馳せ、また書も善くした。神田御玉ヶ池の梁川星巖舊宅を購入し玉池仙館と稱して住したが、晩年に歸郷して文墨を樂しむ餘生を送った（『明治漢詩文集』筑摩書房、一九八三、「略歴」頁四一八參考）。董康は『曼殊留影』と宋紹興本『梅宛陵集』を石埭の舊藏と記すが、これは誤り。兩本は昭和十一年（一九三六）六月（二十二日）に入開札の故亭文庫の賣立ての目錄（故亭文庫内野家竝某家藏品入札）に見え、前者は「三五二 曼

殊留視圖冊「石埭外題」、後者は「九宗（宋が正しい）刊宛陵集 十冊」と記されている。『曼殊留影』（『曼殊留視圖冊』）に石埭の外題があることから（商務印書館影印本には存せず）、董康は彼の舊藏と誤認し、さらに宋紹興本『梅宛陵集』もその所藏であったと誤解したと思われる。また商務印書館本『曼殊留影』の張元濟の跋文に、内野皎亭（明治六年一八七三—昭和九年一九三四。名は悟、通稱は五郎三）の所藏を借りて撮影し、影印出版したことが言及されているので、『曼殊留影』は永坂石埭の舊藏ではなく、内野皎亭の藏書であったことは明らかである（書藏の影印本の帙題簽には「皎亭鑒藏（小字雙行）曼殊留影之本」と墨書する）。なお宋紹興本『梅宛陵集』は北宋の梅堯臣『宛陵先生文集』六十卷の宋版残本であるが、これは上海圖書館に現藏され、『上海圖書館藏宋本圖録』（上海古籍出版社、二〇一〇年九月、頁一三二）には、「宋紹興十年（1140）汪伯彦刻嘉定元年（1208）補版十六年至十七年（1223～1224）重修本」存三十卷、十三至十八、三十七至六十」という刊本であり、日本から「中土」にもどって陳澄中の得るところとなったと記されている。董康が購入者の一人として陳澄中を推測したのは正鵠を得ていたといえよう。家藏の『皎亭文庫内野家竝某家藏品入札』には、『宛陵集』の落札價格を「230圓」と鉛筆書きしている。

（3）王三傑の「哀詞」「發紉詞」は、影印本では李澄中の後に配次され、「山陰人」の三字を見ない。

二十八日

晴れ。毅孫の手紙を受け取り、鐵保が夏季休暇で旅行して測量實習を行い、それが終わって上海に戻ったと知る。また申保が北京大學の地質科の入試に合格したことが述べてあり、玉姬はこのことを聞いて大變に喜び安心した。また北平の劉抱愿の手紙を受け取り、本校の法律系に公牘の課目が増設され、私に擔當させることになったと知る。科擧が廢止されてから、各大學の卒業生は、新知識は豊富であるが、各種の試験を受け、選抜されて部署に分屬し、政務の上でこのことを行うに至っては、おおむねが文章を書き執務することができない。こ

とに歴史が始まって以来、政治上の大文章は公牘によって表現しなかったことがないことを知らない。本校の主任が、ここに考慮したのは、至極、當然の急務である。顧二が東京からやって来た。晝食を共にしてから歸っていった。小林に手紙を出し、百圓を添え、高野山親王院の水原堯榮任職に轉送して、貞慧の供養料としてもらうよう依頼した。北平にいたときに、本山から孟蘭盆參詣の案内があったが、その頃、旅行の準備で慌ただしくしており、このことにまで氣が回らなかったのも、今、その補いとした。また申保に手紙を出し、試験の様子を訊ねた。

貞慧夫人小傳

夫人、小名は娃、字は綺卿。源は博陵に出づ。余の第五姨の河東氏に適者とよの養女なり。姿性明燼くわ（性格が清らかで美しい）、儀止詳華（立ち居振る舞いがしとやかで綺麗）にして、婉變えんれんとして歡を承け（美しくて氣に入られ）、備つさに鍾愛せらる。姨おばの夫の筱驪微君（朝廷の招聘を辭した隱士）は單門（縁故が少なく貧しい家柄）孤立にして、門に期功（親疎に應じ五等級の喪服を着けるべき親族）を絶つ。老いを篤くし情を慰め、視ること己の出に同じ。姨は先慈（亡母）と孿生ふたご（雙子）たりて、情誼素より摯まことなり。余の孤露（幼少で父を亡くした境遇）を憐れみ、鞠教（養育と教育）に任ぜんことを願ふ。年十四にして、招きて其の家に入れ、名師を延まねぎ學業（科擧のための勉學）を課し、即ち夫人をして伴讀せしむ。師、授くるに『毛詩』『女誡』を以てし、耳に諳まじ誦を成す。稍や長じて、韻語の『花間集』『才調集』

を習ひ、口に上せて了たり。余の博士弟子員に補せらるる比、
姨と先慈と、夫人の笄年（女子の成人の年齢、十五歳）を待ち、
贅して（入り婿となつて）其の業（家産）を承くることを協議す。
事、叔の贈公の聞く所と爲り、絶産を覬覦する（相續人のない財
産を得ようと望んでいるとのこと）を以て嫌と爲し、毀議を誡め、
且つ爲に弘農氏（楊氏）と婚することを論ず。姨、心滋いよ憚ら
ず。

戊子（光緒十四年、一八八八）、余は秋闈に捷し（郷試に合格し）、
己丑（同十五年、一八八九）、南宮（會試）に聯捷し、庚寅（同
十六年、一八九〇）、殿廷の諸試に補せられ（進士となり）、西曹（刑
部）に觀政す。是の年、姨、病歿す。垂危（危篤に近いころ）に、
先慈の手を執り、夫人を以て相屬す。先慈、余を以て出で繼がしめ、
兼祧（一人で二家系の後嗣となり祭祀を引き繼ぐ）の子の婦を
納るるの俗例を援き、復前約を申ぬる（前の約束を再び結ぶ）こ
とを允し、姨始めて瞑す。歲杪（年末）、余、假を乞ひて親を省
するに、先慈は傷寒に嬰り危殆す。藥鑪病榻、俱に夫人に頼り、
調護以て痊ゆ。已に諏吉し（吉日を選び）先に弘農氏を迎へんとす。
余は夫人の服（服喪期間）の終はるを俟ち並び舉げんと欲し、固
く期を緩くせんことを請ふも、可されず。翌年、姻を畢ふ。都に
入り職を供し、部署稍定まり、板輿もて迎へ養ふ（親を任地に迎
え養う）。癸甲（癸巳、甲午。光緒十九、二十年。一八九三、
九四）の交、先慈暨（おと）嗣慈の憂（死去）に丁り、歸りて窀穸（墓
に埋葬する）を謀り、仍りて姨家に寓す。燕見（私的に會う）毎

に藝を権し（學問・文藝を討論する）、中表（いとこ）の禮を執
り惟謹む。禮を讀み家居するも、人事牽率し（わづらわし）、慈
闈（母）の治命（生前の遺言）、遂に沈淪を致す。服闋り北上す
るに、夫人、郎潛（長く昇進せず）清素（清貧）なるを以て、金
條（金の延べ棒）を出し脱し（手放し）、以て匱竭（窮乏）を補ふ。
未だ幾ばくもあらずして徵君下世し、族弟の某に由りて入り嗣が
しむ。

庚子の拳禍（光緒二十六年（一九〇〇）の義和團の亂）作り、
畿輔騒然たり。車駕西幸する（西太后が西安に難を避ける）も、
余は職を守り未だ去らず。同郷の某鉅公、醜金して京僚を賑（救
濟）し、夫人は二百金を附し至る。危城を措挂し（支え）、未だ
溝壑に捐てられざるは、其の徳に沐すればなり。

辛亥の役（宣統三年（一九一）の辛亥革命）、地を避けて東
游す（日本に行く）。春明の夢（官僚として出世する夢）醒め、
時に郷思に切にして、尺素（書翰）往還すれども、勞結（結ばれ
た思い）を喻る莫し。癸丑（民國二年、一九一三）、船書歸航し、
里に旋り走訪す。適たま親串（親戚）の家の慶筵（祝宴）に赴き、
之を跡ぬれば袈履（一族の子弟）庭に盈ち、「夫人は」信を聞き
て出で逐ふ。聽鏡卜筮、未だ閨憶を萌さず、花慵く玉筲やかに、
正に茂んなる華年なり。輿を命じ偕に返り、行滕（旅囊、旅行の
荷物）を囊の書室に安置す。余曰く、「虞らざりき游子今館甥（女
婿）と作る」と。夫人嫣然（にこり）として微かに頷らむ。
茲より殮饌、躬自ら潔治す。每晚、小鬟（若い侍女）を携へ出で

て情話し、午夜に至りて始めて歸る。藝風老人（繆荃孫）滬（上海）に遊び故書を評論せんことを約し、未だ旬日ならずして、价（召使い）を遣はして邀へ歸らしむ。蓋し其の心潮の漩渦（氣を揉み）、一日三秋に幾からん。籬菊初霜、先人孿生（母と雙生の姨の雙慶（誕生日）、合はせて道場を清涼蘭若に建て、老妗の嚴に侍し僧寮に憩ふ。嚴、舊約を誥し、力めて牌合（結婚）を謀る。爰に馳せて弘農氏に報じ、漢の長勿相忘竟（鏡）暨び小蓬萊閣（清の篆刻家の黃易）鐫する鴛鴦印を納れて聘と爲し、嚴に由りて主に代はらしめ告祭して禮を成す。偶たま前惊を祭し（楽しい思ひ出を語って）、頗る薄倅を譏る。余曰く、「玉鏡臺の事は千古の艶傳なれども、終に年齢を以てすれば未だ姑女に慚はざるのみ」と。夫人曰く、「禮に男子は三十にして娶り、女子は二十にして嫁す」と稱す。蓋し生理に依りて定衡と爲し、茂陵妾を買ふの缺陷を補ふ所以ならん。儂と君とは適たま其の期に符す。胡んぞ匹に匪ずと云はんや」と。

適たま梁新會（梁啓超）司法に長たり、法制を商榷するを以て、電して都に入らんことを促す。夫人、殘秤の陣壘（終盤を迎えた圍碁。政變、混亂の後の政局のこと）、五湖の煙波の恙無きを支へ難し（國內の平安を維持することは困難）と謂ひ、諄として封侯の念を戢めんことを屬す（高官になる思ひを引つ込めるよう心をこめて頼んだ）。方に聘を却けんことを思へども、春明（都の政府）の故知の函（書函）を疊ねて敦く促すに因り、始めて次年の春仲に於いて行を成す。尋いで廷尉（大理院院長）を領し、乃

ち迎へ至り、廡を賃し久遠の計を作す。

維の時、祚運（王朝の命運）更まると雖も、累朝の法物遺跡燦然たり。公餘に偕に名區を歴り、問題詠有り。余は性書を聚むるを喜み、終日、頭を故簡（古書）に埋む。几案陵轢する（書籍が机上から溢れ出る）に至る毎に、夫人、之が爲に典守（保管）整理す。如し異本（珍しい本）に覩へば、紅泥の小印を上を鈴す。顧だ居れば恆に鏡に對ひて悽嘿し（悲しみ黙って）、之に叩へば、曰く、「禍福倚伏すとは、『老子』の名言。今、既に合歡すれども、頗る造物（天）の人を忌むを慮る」と。多方に解慰するも、終に未だ釋然たらず。

乙卯（民國四年、一九一五）春、猝かに溫證を感じ（腸チフスに罹り）、潮熱往還し、胎を傷ひ流産し、醫療效く罔し。三月初九日に至り、失血して殞す（死す）、年三十六。曉鐘禪師を挽きて讚佛皈依せしめ、貞慧と命名し、並びに『華嚴懺儀』四十二卷を梓行し、用て善行を増す。禪師の弟子の現明上人は金光明法に精しく、嘗て素幕に於いて爲に三生を叩く。始め天女散花の相を現はし、次に一甲第（立派な邸宅）を現はす。綠楊の樓閣、翠荔の垣牆。一人門に佇み候ち、介士（鎧武者）側らに侍す。姪婿たる（たおやかで美しい）女郎の油壁（車の種類）に乗りて至る有り。於以て脩短數有る（壽命の長短は定めがあること）を知るなり。遺稿叢殘し、尙ほ編訂を待つ。

課花主人（董康）曰く、余と夫人は禮を以て義を以て情を以て允に宜し。分を閨中に定め、端を倫始（夫婦）に克くす。詎ぞ格

に中る餘親（親族として正當であるが遠縁の者）、定軌（定まった規則）に歧かるる（定まった規則に背くこと）を致さん。玉釵の約を尋むる（約束を重ねる）に追ひ、未だ前愆（過去の過ち）を弭めず。紅豆に詩を題し【紅豆圖一幀有り】、遽かに逝景を催す（短命な死を急に迎えた）。夢境を溫循すれば（繰り返して巡ると）、盡然（悲しみいたむさま）として神傷む（こころ傷む）。

(1) 董康は、表妹（従妹。董康の實母高氏の妹の養女）であり、非正式な妻でもあった貞慧夫人、すなわち柳綺卿の生涯を記した文章として、この「貞慧夫人小傳」のほかに、「河東君行述」を著している。「河東君行述」は、上海圖書館所藏の董康手稿本である。未刊であったが、楊月英氏が整理、校定して論文「法學者の心の苦しみ—董康『書舶庸譚』中の苦澁に満ちた戀愛を通して—」（『學林』第六六號、中國藝文研究會、二〇一八年五月）に附録している。なお楊論は、「河東君行述」に「眞實の情況」が記録され、「貞慧夫人小傳」には「美化」潤色した點が見られると指摘している。「貞慧夫人小傳」の訓注には楊氏の論文と附録の「河東君行述」の録文を參考にした。

(2) 「立」の原文は「允」であるが、文意が通じない。「允」は「立」の形近の譌とみなし、「立」に改めて解釋すべきであり、『太平廣記』卷四五三「李令緒」（出『騰聽異志錄』）に「我は單門孤立、亦た親表無し」という用例がある（楊月英氏の教示による）。王君南の整理本（河北教育出版社、二〇〇〇年一月、上海人民出版社、二〇一八年七月）、朱慧の整理本（中華書局、二〇一三年六月）は、みな「單門孤、允門絕期功」と標點するが、よろしくない。

(3) 「嗣慈」は養子先の母、義母。董康は幼少時に同族の董連芳家の繼嗣となっており、「嗣慈」は董連芳の未亡人の范氏を指す。

(4) 「聽鏡」は、除夜あるいは元日の夕べに鏡を胸に抱き門口に出て人の言葉を聞いて吉凶を占う習俗。「卜筮」は、筮に女の衣裳を着せた「箕姑」を二人の子供に持たせ、砂を敷いた盤に文字を書かせて吉凶を占う元宵の日の習俗。蘇州地方を中心に行われた。董康の故郷の武進（常州市）は蘇州の北邊に當たる。

(5) 「玉鏡臺」は、晉の溫嶠が從姑（おば）劉氏のひとり女を後妻として迎えたときの結納の品で、溫嶠は、その新婦から「老奴」といわれた（『世說新語』假譔）。

(6) 前漢の文豪の司馬相如が茂陵の人のむすめを妾としようとしたところ、妻の卓文君が「白頭吟」を作って縁を絶とうとしたので、相如は思い止まったという故事（『西京雜記』卷三）。

(7) 「老子」第五十八章に「禍兮福之所倚、福兮禍之所伏（禍は福の倚る所、福は禍の伏する所）」とある。

(8) 「溫證」ではなく、實際は墮胎藥の服用によるものであったことが楊氏前掲論文（頁一一三）に明らかにされている。なお本書四卷本の卷四・民國十六年四月八日條には「血證」とある。

(9) 本書四卷本の民國十六年四月八日條に載せる「感逝」詩其二にも「徒らに羅帳に憑り傾城を幻す」という句があり、その自注に「廣濟寺の僧現明は金光明術を諳んじ、嘗て就いて因果を叩くに、衛公紅拂の故事を現すれども名姓同じからず。云々」とある（九卷本は「感逝」詩を卷四上の四月十日條に載せ、自注を刪去する。「衛公紅拂の故事」とは、衛公李靖のもとに隋の司空の楊素の紅拂妓が來奔し、姓は張と名乗って李靖に仕え、後に現れた虬髯客と共に李世民の唐王朝創業に協力したという故事（唐代小説の杜光庭「虬髯客傳」）である。

(10) 「倫始」は、宋の沈該『易小傳』卷四に「人倫始於夫婦（人倫は夫婦に始まる）」とあるのにより、夫婦をいう。

(11) また四卷本の民國十六年四月八日條に、貞慧夫人（博陵君）の死去に關して「臨終に、名畫士の蔣克莊を挽き、紅豆圖を寫し余に貽らしむ。曾て松隣（友人の吳昌綬）に丐ひ題墨せしむ」とある。「紅豆」は、豆科蔓性常緑樹に屬する紅豆樹や相思子（和名とうあずき）の類の實を指す。詩詞などの文學作品では男女の愛情を現わす植物として多く用いられる。

二十九日

孫逸齋に手紙を出す。玉姫と手すりにもたれて遙か彼方を眺めると、白い雲の湧き起こった下に遠山が見えたが、これが大島である。そのやや近くで海面にこんもりと苔むしたように浮かんでいるのが初島である。それより東が伊東であり、毎日一回、伊東からここを経由して

大島（伊豆大島）に向かう連絡船の往復便があり、朝晩八時に海岸に短時間、停泊する。女中によれば、大島の隣に三原山があり、岩壁から煙が糸筋のように出ているが、これも日本の火山の一つである。失意の青年男女がよくここで心中するので、現在では巡査が見回り、先に進むのを禁止している、とのことである。初島の住民はわずか四十二戸であり、政府の法律で戸口を制限し、もし増加すれば、別の地域に分けて居住させている。島内には井戸がなく、天水を飲んでいく。外から電氣を引くことができないので、今でもランプを燈している。住民は漁業を行っている。

（一）原文は「隣大島有三原山」。三原山は伊豆大島の中にあるので、「大島の隣に三原山がある」というのは董康の誤解である。

三十日

午後三時、玉姫と海岸を散歩し、金色夜叉の松（お宮の松）を撫で、しばらく周りを巡る。松の幹は一抱えほどもあり、地面から二尺ばかり上を横ざまに伸びている。もとは幹が二本あったが、一本は枯れて鋸で切り取られ、一本は風に吹き折られたものの、生命力が絶たれず、枝葉がかえって繁茂した。松のあたりに宮子の小さな繪を賣る者がいる。彼女は徳川時代の女性で、従兄弟の貫一と結婚の約束をしていたが、両親が無理矢理あきらめさせて富豪に嫁がせた。貫一は彼女の家で勉強していたが、ここに至って離れ去った。彼は大學卒業後に獨立して商賣を經營し、財産豊かになった。女は、その後離縁され、何

度も貫一に手紙を送ったが、彼は返事しなかった。ある日、親戚の家で出會い、わけを問い詰めて復縁を求めた。しかし貫一は、「私は未婚の妻の宮子に戀しているため、一生、結婚しないと誓った。今離縁された宮子は、私の望む相手ではない」といった。そこで女はここにやってきて海に飛び込み死んでいった。果物屋に寄り、西瓜を二箇買って、持って歸って食べると、大變に美味であった。

（一）董康の記す『金色夜叉』のあらすじは多くの誤りがある。先ず女主人公は、宮（姓は鳴澤）であって、「宮子」でなく、もとより江戸時代の女性でない。貫一は高等中學を途中でやめて高利貸しのもとで奉公したので、大學を卒業していない。尾崎紅葉の死去により『金色夜叉』は未完となり、小栗風葉が補作して結末をつけたが、宮の熱海での入水自殺は描かれていない。

三十一日

毅孫と田中の手紙を受け取る。夜になって大雨。

水調歌頭 卽事書示玉姫 水調歌頭 卽事、書して玉姫に

示す

| | |
|--------|-------------|
| 深遼山之麓 | 深遼なる山の麓 |
| 縹渺駕層樓 | 縹渺として 層樓 駕す |
| 樓上瓶花娟楚 | 樓上の瓶花は娟楚にして |
| 樓下綠莎柔 | 樓下の綠莎は柔らかなり |
| 消受華清膩漲 | 華清の膩の漲るを消受し |

【厲内温泉爲此間冠（厲内の温泉は此の間の冠爲り）】
 想像摩訶初夜 想像す 摩訶として初夜に

依樣擅風流。

様に依りて風流を擅しにするを

且被漂零感

且しほらく漂零の感を被おひ

狂態廢吾儔。

狂態 吾が儔ともがらに廢おらん

潮聲激

潮聲激しく

風聲咽

風聲咽つねび

鎮無休。

鎮つねに休やむこと無し

久醒春明殘夢

久しく春明の殘夢より醒さむれば

何樂更何憂。

何をか樂しみ更に何をか憂へんや

起視天空皓魄

起ちて天空の皓魄を視れば

恰好時逢八月

恰かも好し 時に八月に逢ふ

【是日適爲舊曆七月之望（是の日適たま舊曆七月の望と爲す）】

一例醉中秋。

一例 中秋に醉そぐ

共此蒼茫景

此の蒼茫の景を共にし

聊作五湖游。

聊か五湖の游なを作さん

水調歌頭

卽事の作、これを書いて玉姬に示す

深く奥まった山の麓に、遠く遙かな天空を凌ぎ高樓が聳える。

その樓上の花瓶には優美な花が生けられ、樓下には緑の芝生が柔

らかに広がる。華清池のようなしっとりとした温湯を身に受ける

と【旅館内の温泉はこのあたり一番である】、早くも初更となって、

昔のままに洒脱な遊びを存分に楽しんでる自分が想像される。

しばらく漂泊の思いを洗い除き、この狂態を私の仲間を送り届け

たい。

海潮の音は激しくとどろき、風の音は咽び、常に止むことがな

い。都での宮仕えは目覚めで途切れた夢に等しいと悟ってから長

く経ち、何を樂しみとすることも何を憂うこともなくなった。

立ち上がって天空の明月をよく見ると、ちょうど頃は八月【この

日はたまたま舊曆の七月の満月であった】、誰もが一律に酒を地

に注いで祭る中秋である。あなたと共にこの月明かりに広がる風

景を樂しみ、すこし范蠡の五湖の旅の気分になった。

(1) 「水調歌頭」は詞牌の名。本譯注(一)民國二十二年十一月九日條(本誌第一號頁八八)參照。「卽事」はその場のことを題材にして詠じること。

(2) 「華清」は、陝西省西安市の西方に位置する驪山の麓の温泉で、唐の玄宗はここに離宮の華清宮を設け、楊貴妃を伴い避寒に訪れた。唐の白居易は「長恨歌」に「春寒くして浴を賜ふ華清の池、温泉水滑らかにして凝脂を洗ふ」と詠った。

(3) 「摩訶」は、大、多、勝(まさる)を意味する佛教語であるが、清末・近代の詞では時間の早く過ぎるさまに用いる例がある。況周頤の「金縷曲・美人骨」詞に「稱水肌、清涼無、摩訶秋早(水肌に稱ひ、清涼にして汗無く、摩訶として秋早し)」とある。また龔平伯「臨江仙」詞(「龔平伯全集」第一卷「古槐書屋詞」)卷二、花山文藝出版社、一九九七年一月、頁六五六)に「微浣新詞漱玉、休嗟歲月摩訶(微もて新詞を洗ふ漱玉、嗟くを休めよ歲月の摩訶を)」とある。

(4) 「春明」は唐の宮門の名であり、都を指すが、轉じて仕官の意に用いることがある。清の錢謙益「初學集」卷八〇「寄長安諸公書」に「謙益衰頹晚、放棄時。春明之夢已殘、京華之書久絕(謙益衰頹晚、明時に放棄せらる。春明の夢已に残し、京華の書久しく絶ゆ)」とある。

(5) 春秋末の范蠡は越王の勾踐を輔佐して呉を滅ぼした後、輕舟に乗って五湖に浮かぶ旅をして、その最後は分からなかったという(「國語」越語下)。

これに因んで「五湖」は隱逸の地を指し、本詞の「五湖游」は實社會から離れた氣ままな旅をいう。

(立命館大學文學部教授)

